

臨床医学

内科学講座

消化器・肝臓内科

| | |
|------------------|-----------------|
| 教授：田尻 久雄 | 消化器病学(消化管・膵臓) |
| 教授：伊坪真理子 (兼任) | 消化器病学(肝臓) |
| 教授：銭谷 幹男 (兼任) | 消化器病学(肝臓) |
| 教授：大草 敏史 | 消化器病学(消化管) |
| 教授：高木 一郎 | 消化器病学(胆道・肝臓・膵臓) |
| 教授：相澤 良夫 | 消化器病学(肝臓) |
| 教授：西野 博一 | 消化器病学(消化管・膵臓) |
| 准教授：小井戸薫雄 | 消化器病学(消化管) |
| 准教授：石川 智久 | 消化器病学(肝臓) |
| 准教授：穂苅 厚史 | 消化器病学(肝臓) |
| 講師：松岡 美佳 | 消化器病学(消化管) |
| 講師：小池 和彦 | 消化器病学(肝臓) |
| 講師：須藤 訓 | 消化器病学(消化管) |
| 講師：宮川 佳也 | 消化器病学(消化管) |
| 講師：有廣 誠二 | 消化器病学(消化管) |
| 講師：小野田 泰 | 消化器病学(肝臓) |
| 講師：安部 宏 | 消化器病学(肝臓) |
| 講師：上竹慎一郎 | 消化器病学(肝臓) |
| 講師：猿田 雅之 | 消化器病学(消化管) |

教育・研究概要

I. 消化管に関する研究

1. クロウン病狭窄病変に対する内視鏡的バルーン拡張術後の抗 TNF- α 抗体による再狭窄予防の検討

クロウン病 (CD) 患者 12 例を対象に内視鏡的バルーン拡張術 (Endoscopic balloon dilation: EBD) 後に抗 TNF- α 抗体である Infliximab (IFX) もしくは Adalimumab (ADA) を投与することによる、消化管狭窄病変に対する再狭窄の予防効果について検討を行った。抗 TNF- α 抗体を EBD 前から使用していた 7 症例、EBD 後に開始した 5 症例の全例で、EBD 後もイレウス症状の再燃なく経過したが、4 症例で軽度の狭窄性変化を確認し、再度 EBD を施行した。4 症例では内視鏡的に再狭窄がないことを確認し得た。CD の腸管の狭窄病変に対する EBD が有効であることが再確認でき、さらに抗 TNF- α 抗体が再狭窄を予防しうる可能性が見出された。

一方、初発クロウン病患者の細胞膜脂肪酸組成は健常人や初発潰瘍性大腸炎患者と比べ大きく異なることから、初発クロウン病患者は脂質代謝酵素である delta 6-desaturase の活性が亢進していると考えられた。

2. 消化管癌に対する蛍光分子イメージング法並びにイメージングガイド下の光線療法の開発
癌治療用モノクローナル抗体と近赤外蛍光プローブを用いて、癌分子標的特異的な蛍光イメージングとその治療を臨床的前研究 (動物モデル) にて明らかにしてきた。近年、ヒト胃癌マウスモデルを用いて、分子標的特異的な蛍光分子イメージング法並びにイメージングガイド下の光線療法を開発した。

3. 画像強調観察と病理組織学的解析を用いた大腸鋸歯状病変の内視鏡学的特徴の検討

Sessile serrated adenoma/polyp (SSA/P) は、近年、大腸癌の前駆病変であることが報告されている。Auto fluorescence imaging (AFI), narrow band imaging (NBI) を用いて、hyperplastic polyp (HP) と sessile serrated adenoma/polyp (SSA/P) の鑑別が可能であるかを検討した。AFI では病変の色調変化を、NBI 拡大観察では血管拡張の有無、粘液の付着の有無、腺管開口部の円形開大の有無にわけて検討した。それぞれを SSA/P とした場合の感度、特異度、正診率はそれぞれ 43%/68%/52%, 10%/96%/41%, 94%/40%/75%, 80%/72%/78% であり、粘液付着と腺管開口部の円形開大は鑑別に有用であると考えられ、内視鏡的切除の対象病変の選別に有用であると考えられた。

4. 炎症性腸疾患患者における成分栄養剤 (エレンタール®) 併用大腸内視鏡検査前処置法の有用性

炎症性腸疾患患者における成分栄養剤 (エレンタール®) 併用大腸内視鏡検査前処置法の有用性について検討した。大腸内視鏡検査前日にエレンタール®1,200ml を内服し、検査当日にポリエチレングリコール (PEG) を服用した。PEG 服用量、腸管洗浄度、受容性、安全性について検討した。エレンタール®併用前処置法は PEG 減量が可能で、かつ被験者の受容性と安全性に優れており、IBD 患者に有用な前処置法と考えられた。

5. 炎症起因性大腸モデルマウスの大腸粘膜腫瘍性病変の検出における 5-Aminolevulinic acid (5-ALA) を用いた蛍光観察の有用性

潰瘍性大腸炎の長期経過観察症例において、炎症性発癌を早期発見することは重要である。私達は炎症起因性大腸癌発癌マウスにて、5-Aminolevulinic acid (5-ALA) を用いた蛍光顕微鏡観察が腫瘍性病変の発見に有用であることを示した。

6. 潰瘍性大腸炎患者に対する亜鉛含有ポラプレジンク注腸治療の有効性の検討

ポラプレジンク注腸は、中等症から重症の潰瘍性大腸炎患者において、有意に内視鏡所および臨床所見を改善させた。特に注腸の届く範囲である直腸、S状結腸において有意に内視鏡の所見の改善を認めた。ポラプレジンク注腸は、潰瘍性大腸炎患者において粘膜修復に有用な新たな治療法であることが示唆された。

7. アザチオプリン (AZA) の副作用

アザチオプリン (AZA) の代謝酵素である Inosine triphosphate pyrophosphohydrolase (ITPA) の遺伝子に 94C>A 変異がある患者は AZA 副作用発現が多かったが、副作用発現の直接的要因でないことが示唆された。

8. 膵臓癌に対する新規免疫療法

2種類のツール様受容体を刺激した樹状細胞とエタノール処理した腫瘍細胞との融合細胞は TGF- β 1 阻害と IL-12p70 誘導を介して、強力な細胞傷害性 T 細胞を誘導した。

II. 肝臓に関する研究

1. 核酸アナログ製剤による慢性 B 型肝炎の治療反応性の検討

慢性 B 型肝炎の核酸アナログ製剤使用での治療反応性を、耐性株出現を経時的な遺伝子解析と治療反応性について解析し、新たな併用療法の可能性について検討している。

2. C 型慢性肝炎の臨床病理学的検討

臨床病理学的に C 型慢性肝炎における肝病理所見と血液生化学検査値の相関について検討している。長期に渡る、C 型慢性肝炎の経過において肝組織における活動性と線維化進展について危険因子について検討している。

3. 原発性胆汁性肝硬変 (PBC) の長期予後に関する検討

PBC における、臨床所見、血液生化学検査値、さらに肝生検所見も加え予後に寄与する因子を多角的に統計学的に解析している。臨床病態とマイクロ RNA 表出との関連についても検討している。

4. 自己免疫性肝炎 (AIH) モデルマウスにおける NKT 細胞の動態解析

NKT 細胞とサイトカイン動態を検討し、AIH における免疫動態の変動についても解析した。

5. 肝硬変における栄養学的不均衡

食物摂取頻度調査 (FFQ) による詳細に肝硬変の栄養学的背景を検討している。個々症例に対して最適な栄養介入法の開発を試みている。

6. 非アルコール性脂肪肝疾患 (NAFLD) における栄養評価

NAFLD は、メタボリック症候群と多くの重複する病態が多い。栄養学的不均衡と病態との関係を検討、新たな栄養介入の可能性を模索している。

7. 睡眠時無呼吸症候群 (SAS) と非アルコール性脂肪性肝炎の関連性

SAS と NASH の栄養学的不均衡、肝機能障害との関係について検討した。さらに、生活習慣の類似性について、食物摂取頻度調査 (FFQ) にて詳細に検討した。

8. 肝細胞癌の予後予測因子

白血球数、CRP とアルブミン値が肝細胞癌の予後不良因子であった。加療前の新たな予後予測指標の算定法について検討している。

9. 慢性 HCV 感染と脂質代謝の密接な関連性

血中脂質プロファイル、アポリポ蛋白の面から検討した。HCV に対する抗ウイルス療法 (2 剤, 3 剤併用療法) の有用性と、治療効果に及ぼす IL28B 遺伝子 SNP, HCV 変異, リポ蛋白代謝の影響を明らかにし、至適治療法について検討した。

10. 空腹時 ^{13}C -glucose 呼吸試験 (FGBT) による肝臓インスリン抵抗性診断試験の開発

肝臓のインスリン抵抗性を評価する検査法として空腹時 ^{13}C -glucose 呼吸試験 (FGBT) を用いた肝臓糖代謝評価法を開発した。まず、グルコースの生体内代謝モデルを作成し、5 コンパートメントモデルを採用した。作成した 5 コンパートメントモデルによる呼吸 ^{13}C 排出速度の動態曲線は、実測値とよくフィットした。健常人男女では、 ^{13}C 排出速度の動態曲線の AUC₃₆₀ は女性で大きかったが、生体内シミュレーションでは、女性は男性に比較し、グルコース代謝の効率がよいことが示唆された。同一患者の薬剤による治療前後において、AUC₃₆₀ 改善例で、やはり肝臓内グルコース代謝の改善がシミュレーションからも推測された。

11. TGF- β 活性化反応を利用した肝障害診断法の開発

TGF- β 活性化反応の過程で生じる遊離 Latency Associated Protein 断片 (LAP-D) を特異的に認識する抗体 (L59 抗体) を用いて ELISA 系を構築し、

肝疾患検査における血漿 LAP-D 測定の臨床的意義を検討した。B 型肝炎症例での検討では、核酸アナログ製剤で ALT レベルは低下しても、血漿 LAP-D レベルが高値に推移する症例を認めた。こうした症例では、核酸アナログのみでは、肝臓の線維化を十分抑制できていない可能性が示唆される。

「点検・評価」

質の高い臨床を支えるためには研究の活性化が欠かせない。平成 24 年度は、原著論文 23 編、総説 25 編、著書 12 冊、その他 32 編、学会発表は 116 件と研究業績は昨年と同じく堅調であり、臨床研究の成果が論文として刊行されている。国内外の研究施設ならびに学内の基礎医学講座との translational research が円滑に推移している証左である。消化器・肝臓内科の外来・病棟における診療実績数は病院内で常に上位であり、日常診療がきわめて多忙ななか、スタッフ全員が教育・研究にも努力している。大学病院に勤務する医師にとって、とくに診療、教育、研究のバランスをとることが重要な課題であり、個々のモチベーションの向上にも直結する。毎週火曜日に行う症例検討会、画像カンファレンス、総回診のほか、研究グループごとの研究発表会、抄読会を定期的に実施するとともに、若い先生方にも積極的に学会や研究会に発表する機会を作っている。また、7 年前より実施している内視鏡部との人事相互交流が定着しており、若い先生方にとって、知識と技術の修得目標が明確になっている。当科では常に卒前・卒後教育の充実にも力を入れており、学生ならびに研修医からの評価はきわめて高く、平成 23 年 13 名、平成 24 年 13 名、平成 25 年 18 名と過去 5 年連続して 10 名を超える新入の医局員が仲間に加わり、医局全体がますます活性化し、関連病院への出向にも余裕がでてきている。

研究業績

I. 原著論文

- Sumiyama K, Kiesslich R, Ohya TR, Goetz M, Tajiri H. *In vivo* imaging of enteric neuronal networks in humans using confocal laser endomicroscopy. *Gastroenterology* 2012; 143(5) : 1152-3.
- Arihiro S, Kato T, Ito K, Saruta M, Nikami T, Suzuki T, Tajiri H. Correlation between symptomatic improvement and quality of life in patients with reflux and dyspeptic symptoms. *J Clin Biochem Nutr* 2012; 50(3) : 205-10.
- Imazu H, Kanazawa K, Mori N, Ikeda K, Kakutani H, Sumiyama K, Hino S, Ang TL, Omar S, Tajiri H. Novel quantitative perfusion analysis with contrast-enhanced harmonic EUS for differentiation of autoimmune pancreatitis from pancreatic carcinoma. *Scand Gastroenterol* 2012; 47(7) : 853-60.
- Kinoshita A, Onoda H, Imai N, Iwaku A, Oishi M, Fushiya N, Koike K, Nishino H, Tajiri H. Comparison of the prognostic value of inflammation-based prognostic scores in patients with hepatocellular carcinoma. *Br J Cancer* 2012; 107(6) : 988-93.
- Hokari A, Ishikawa T, Tajiri H, Matsuda T, Ishii O, Matsumoto N, Okuse C, Takahashi H, Kurihara T, Kawahara K, Maruyama I, Zeniya M. Efficacy of MK615 for the treatment of patients with liver disorders. *World J Gastroenterol* 2012; 18(31) : 4118-26.
- Aihara H, Saito S, Ohya T, Tamai N, Kato T, Tajiri H. A pilot study using reduced-volume oral sulfate solution as a preparation for colonoscopy among a Japanese population. *Int J Colorectal Dis* 2013; 28(1) : 83-7.
- Kanazawa K, Imazu H, Mori N, Ikeda K, Kakutani H, Sumiyama K, Hino S, Ang TL, Omar S, Tajiri H. A comparison of electronic radial and curvilinear endoscopic ultrasonography in the detection of pancreatic malignant tumor. *Scand J Gastroenterol* 2012; 47(11) : 1313-20.
- Tamai N, Saito Y, Sakamoto T, Nakajima T, Matsuda T, Tajiri H. Safety and efficacy of colorectal endoscopic submucosal dissection in elders: clinical and follow-up outcomes. *Int J Colorectal Dis* 2012; 27(11) : 1493-9.
- Uchiyama K, Odahara S, Nakamura M, Koido S, Katahira K, Shiraishi H, Ohkusa T, Fujise K, Tajiri H. The fatty acid profile of the erythrocyte membrane in initial-onset inflammatory bowel disease patients. *Dig Dis Sci* 2013; 58(5) : 1235-43. Epub 2013 Jan 11.
- Kakugawa Y, Saito Y, Saito S, Watanabe K, Ohmiya N, Murano M, Oka S, Arakawa T, Goto H, Higuchi K, Tanaka S, Ishikawa H, Tajiri H. New reduced volume preparation regimen in colon capsule endoscopy. *World J Gastroenterol* 2012; 18(17) : 2092-8.
- Kinoshita A, Onoda H, Imai N, Iwaku A, Oishi M, Tanaka K, Fushiya N, Koike K, Nishino H, Tajiri H. The Glasgow Prognostic Score, an inflammation based prognostic score, predicts survival in patients with hepatocellular carcinoma. *BMC Cancer* 2013; 13 : 52.
- Nakano M, Saeki C, Takahashi H, Homma S, Tajiri H, Zeniya M. Activated natural killer T cells produc-

- ing interferon-gamma elicit promoting activity to murine dendritic cell-based autoimmune hepatic inflammation. Clin Exp Immunol 2012; 170(3): 274-82.
- 13) Koido S, Homma S, Okamoto M, Namiki Y, Takakura K, Takahara A, Odahara S, Tsukinaga S, Yukawa T, Mitobe J, Matsudaira H, Nagatsuma K, Uchiyama K, Kajihara M, Arihiro S, Imazu H, Arakawa H, Kan S, Komita H, Ito M, Ohkusa T, Gong J, Tajiri H. Combined TLR2/4-activated dendritic/tumor cell fusions induce augmented cytotoxic T lymphocytes. PLoS One 2013; 8(3): e59280.
 - 14) Kakutani H, Hino S, Koyama S, Uchiyama Y, Sumiyama K, Imazu H, Kawamura M, Tajiri H. How do we select an endoscopic treatment for esophageal varices on the basis of hemodynamic analysis using color Doppler endoscopic ultrasonography. Surg Laparosc Endosc Percutan Tech 2012; 22(5): 410-5.
 - 15) 小野田泰, 佐伯千里, 及川恒一, 木下晃吉, 伏谷 直, 千葉充文, 小林 剛, 小田木勲, 小林裕彦, 坂部俊一, 木島洋征, 宮川佳也, 西野博一, 田尻久雄. 高齢者の非 B 非 C 型肝炎細胞癌症例の臨床的特徴. 日本高齢者消化器病学会誌 2012; 14(2): 12-8.
 - 16) 大谷 圭, 石川智久, 相澤良夫, 藤瀬清隆, 小山 勉, 大草敏史, 田尻久雄. IL-2 長期投与により退縮を認めた肺転移をともなう肝類上皮血管内皮腫の長期生存例. 日消誌 2012; 109(12): 2097-102.
- ## II. 総 説
- 1) Spada C, Hassan C, Galmiche JP, Neuhaus H, Dumonceau JM, Adler S, Epstein O, Gay G, Pennazio M, Rex DK, Benamouzig R, de Franchis R, Delvaux M, Devière J, Eliakim R, Fraser C, Hagenmuller F, Herrierias JM, Keuchel M, Macrae F, Munoz-Navas M, Ponchon T, Quintero E, Riccioni ME, Rondonotti E, Marmo R, Sung JJ, Tajiri H, Toth E, Triantafyllou K, Van Gossum A, Costamagna G; European Society of Gastrointestinal Endoscopy. Colon capsule endoscopy: European Society of Gastrointestinal Endoscopy (ESGE) Guideline. Endoscopy 2012; 44(5): 527-36.
 - 2) 田尻久雄, 穂刈厚史. 消化器内視鏡の歴史と今後の展望. 松仁会医誌 2012; 51(1): 1-8.
 - 3) 大草敏史, 堀内洋志, 荒川廣志, 貝瀬 満, 田尻久雄. 【胃ポリープの意義と鑑別】胃ポリープの自然史と malignant potential 腺窩上皮型過形成性ポリープ. 胃と腸 2012; 47(8): 1216-26.
 - 4) 中尾 裕, 斎藤彰一, 井出大資, 大谷友彦, 二上敏樹, 相原弘之, 池上雅博, 田尻久雄. 【知ってますか! SSA/P とその癌化】LHP (large hyperplastic polyp) と SSA/P は同じか NBI の所見から. 消内視鏡 2012; 24(7): 1139-46.
 - 5) 内山 幹, 小田原俊一, 大草敏史, 田尻久雄. 【「…血が出たんです」- 肛門・会陰部出血へのアプローチ】炎症性腸疾患を疑ったら. JIM 2012; 22(10): 736-9.
 - 6) 田尻久雄. 【消化器疾患診療のすべて】消化器疾患の検査法 上部消化管内視鏡検査. 日医師会誌 2012; 141(特別2): S80-3.
 - 7) 松田浩二, 堀内洋志, 川原洋輔, 吉田幸永, 田尻久雄. 【消化器内視鏡トレーニングのあり方】内視鏡データベースを用いた大腸内視鏡教育の方法と質の管理 外科レジデントへの大腸内視鏡教育を中心に. 臨消内科 2012; 27(12): 1549-54.
 - 8) 加藤智弘, 岩崎哲良, 井出大資, 荒井吉則, 菰池信彦, 光永真人, 猿田雅之, 有廣誠二, 松岡美佳, 田尻久雄. 【どこまで迫れる Colitic Cancer】《症例から学ぶ-これが colitic cancer だ》Colitic Cancer 診断の現状と将来への課題. 消内視鏡 2012; 24(12): 1935-41.
 - 9) 大谷友彦, 炭山和毅, 斎藤彰一, 加藤智弘, 田尻久雄. 消化器内視鏡治療の新たな工夫 大腸病変に対するメスナ局注による Chemically Assisted Endoscopic Submucosal Dissection (CA-ESD) の臨床導入. 消化器医 2012; 10: 16-9.
- ## III. 学会発表
- 1) 小田原俊一, 内山 幹, 久保田隆廣, 三戸部慈実, 飯田貴之, 花井洋行, 荒川廣志, 小井戸薫雄, 大草敏史, 田尻久雄. 炎症性腸疾患患者における Azathioprine 代謝能と副作用発現に関する前方視的検討. 第 98 回日本消化器病学会総会. 東京, 4 月.
 - 2) 小林裕彦, 宮川佳也, 小野田 泰, 木島洋征, 坂部俊一, 伏谷 直, 木下晃吉, 佐伯千里, 小林 剛, 小田木勲, 千葉充文, 西野博一, 田尻久雄. 当院における下部消化管出血症例の検討. 第 98 回日本消化器病学会総会. 東京, 4 月.
 - 3) 猿田雅之, 有廣誠二, 松岡美佳, 荒井吉則, 菰池信彦, 中尾 裕, 井出大資, 岩崎哲良, 光永真人, 加藤智弘, 田尻久雄. 潰瘍性大腸炎に対する外来 Tacrolimus 少量投与による寛解導入および維持療法の試み. 第 54 回日本消化器病学会大会. 神戸, 10 月.
 - 4) 有廣誠二, 猿田雅之, 菰池信彦, 板垣宗徳, 中尾 裕, 高倉一樹, 荒井吉則, 井出大資, 岩崎哲良, 光永真人, 松岡美佳, 加藤智弘, 田尻久雄. 当院における高アミラーゼ血症および膵炎を併発した炎症性腸疾患の検討. 第 54 回日本消化器病学会大会. 神戸, 10 月.
 - 5) 井出大資, 斎藤彰一, 田尻久雄. 当科における大腸カプセル内視鏡検査の知見. 第 30 回日本大腸検査学会総会. 東京, 9 月.

- 6) Ohkusa T, Tajiri H. Targeting intestinal flora as a treatment of IBD. 第98回日本消化器病学会総会. 東京, 4月.
- 7) 天野克之, 銭谷幹男, 岩久 章, 關 伸嘉, 杉田知典, 横須賀淳, 大石睦実, 相澤摩周, 北原拓也, 鳥巢勇一, 梶原幹生, 上竹慎一郎, 瀧川真吾, 小池和彦, 穂苅厚史, 石川智久, 高木一郎, 田尻久雄. 原発性胆汁性肝硬変患者の骨病変の評価と骨代謝マーカーの測定. 第129回成会総会. 東京, 10月.
- 8) 石田仁也, 石川智久, 安藤祐史, 遠藤 誠, 水野雄介, 杉田知典, 中野真範, 相澤摩周, 鳥巢勇一, 佐伯千里, 佐藤憲一, 天野克之, 千葉伸太郎, 穂苅厚史, 田尻久雄. 睡眠時無呼吸症候群の重症度分類と肝機能障害. 第47回日本成人病(生活習慣病)学会. 東京, 1月.
- 9) Odahara S, Uchiyama K, Kubota T, Shimamoto N, Mitobe J, Tsukinaga S, Arakawa H, Koido S, Ohkusa T, Tajiri H. Polymorphism of TPMT/ITPA and risk of adverse reactions among patients with inflammatory bowel disease treated with azathioprine: A prospective study. Digestive Diseases Week 2012. San Diego, May.
- 10) 西條広起, 星野 優, 有廣誠二, 加藤智弘, 田尻久雄. DSS大腸炎マウスにおける Tenascin-C の機能解析. 第54回日本消化器病学会大会. 神戸, 10月.
- 11) 猿田雅之, 有廣誠二, 松岡美佳, 荒井吉則, 菰池信彦, 中尾 裕, 井出大資, 岩崎哲良, 加藤智弘, 田尻久雄. クロウン病狭窄病変に対する内視鏡的バルーン拡張術後の坑 TNF- α 後退による再狭窄予防の検討. 第49回日本消化器免疫病学会総会. 鹿児島, 7月.
- 12) Komoike N, Kato T, Kawakami R, Saijo H, Mitsunaga M, Saruta M, Arihiro S, Matsuoka M, Koido S, Ito M, Homma S, Tajiri H. A study of photodynamic diagnosis of colon cancer generated in DSS (Dextran sulfate sodium) utilizing APC (adenomatous polyposis coli) knockout mice by visualization following oral 5-aminolevulinic acid sensitization. Digestive Diseases Week 2012. San Diego, May.
- 13) 田尻久雄. 消化器内視鏡の現状からみた未来の可能性. 第99回日本消化器病学会総会. 鹿児島, 3月.
- 14) 田尻久雄. 大腸カプセル内視鏡検査-現状と今後の展望-. 第53回日本人間ドック学会学術大会. 東京, 9月.
- 15) 田尻久雄. 内視鏡医学・医療の将来展望. 第84回日本消化器内視鏡学会総会. 神戸, 10月.
- 16) 小野田泰, 今井那美, 岩久 章, 大石睦実, 田中 賢, 小林 剛, 小林裕彦, 木下晃吉, 伏谷 直, 坂部俊一, 木島洋征, 宮川佳也, 小池和彦, 西野博一, 田尻久雄. 当院における高齢者の非B非C型肝細胞癌症例の臨床的検討. 第99回日本消化器病学会総会. 鹿児島, 3月.
- 17) 石川智久, 北原拓也, 相澤摩周, 銭谷幹男, 萩原雅子, 五味優子, 原 裕子, 水野雄介, 杉田知典, 中野真範, 佐伯千里, 鳥巢勇一, 佐藤憲一, 天野克之, 穂苅厚史, 羽野 寛, 田尻久雄. B型慢性肝炎における組織学的病性病期と血液生化学検査値との乖離. 第99回日本消化器病学会総会. 鹿児島, 3月.
- 18) 内山 幹, 小田原俊一, 中村 眞, 小井戸薫雄, 白石弘美, 片平冽彦, 大草敏史, 田尻久雄. 初発炎症性腸疾患患者における赤血球膜脂脂肪酸プロファイル. 第99回日本消化器病学会総会. 鹿児島, 3月.
- 19) 相澤摩周, 石川智久, 田尻久雄. HBV 遺伝子型別での核酸アナログ治療反応性の検討. 第99回日本消化器病学会総会. 鹿児島, 3月.
- 20) 田中 賢, 松浦知和, 松本喜弘, 永妻啓介, 齋藤勝也(海上ビル診療所), 中田浩二, 池脇克則(防衛医大), 高木一郎, 田尻久雄, 鈴木政登. 空腹時 ^{13}C -glucose 呼吸試験を用いた非侵襲肝臓インスリン抵抗性評価法の開発-代謝シミュレーションによる生体内グルコース代謝の推定-. 第48回日本肝臓学会総会. 金沢, 6月. [肝臓 2012; 53(Suppl.1): A268]

IV. 著 書

- 1) 上堂文也(大阪府立成人病センター), 井上晴洋(昭和大学), 田尻久雄. 総論 10) 画像強調観察の基本と原理. 日本消化器内視鏡学会監修. 消化器内視鏡ハンドブック. 東京: 日本メディカルセンター, 2012. p.87-95.
- 2) 郷田健一, 田尻久雄. 消化管 逆流性食道炎の診断基準・病型分類・重症度. 田尻久雄, 五十嵐正広(がん研有明病院), 小池和彦(東京大学), 杉山政則(杏林大学) 編. 臨床に役立つ消化器疾患の診断基準・病型分類・重症度の用い方. 改訂第2版. 東京: 日本メディカルセンター, 2012. p.13-6.
- 3) 田尻久雄. IV. 消化器内視鏡診断・治療の未来. 小原勝敏¹⁾監修, 入澤篤志¹⁾(¹福島県立医科大学) 編. 消化器内視鏡プロフェッショナルの技: 上級者へのステップアップのために. 東京: 日本メディカルセンター, 2013. p.330-4.
- 4) 斎藤彰一, 田尻久雄. IV. 拡大観察(腫瘍の診断) Q18. 腫瘍・非腫瘍の鑑別診断(拡大観察)のポイントとは? 斎藤 豊(国立がん研究センター) 特別編集. エキスパートだけが知っている大腸内視鏡: 挿入のコツと診断の基本: 消化器内視鏡レクチャー (1巻2号). 東京: 総合医学社, 2012. p.275-81.

V. その他

- 1) 相原弘之, 斎藤彰一, 大谷友彦, 鈴木武志, 加藤智

弘, 田尻久雄, 池上雅博. 早期胃癌研究会症例特異な肉眼型を呈し, 通常内視鏡と拡大内視鏡による深達度診断が乖離した早期大腸癌の1例. 胃と腸 2012; 47(4): 579-85.

- 2) Mori N, Imazu H, Futagawa Y, Kanazawa K, Kakutani H, Sumiyama K, Ang TL, Omar S, Tajiri H. EUS-guided rendezvous drainage for pancreatic duct obstruction from stenosis of pancreatojejunal anastomosis after pancreatoduodenostomy. Surg Laparosc Endosc Percutan Tech 2012; 22(4): e236-8.
- 3) Dobashi A, Goda K, Yoshimura N, Sumiyama K, Toyozumi H, Saito S, Kato T, Ishikawa H, Yanaga K, Tajiri H, Ikegami M. Early duodenal adenocarcinoma resembling a submucosal tumor cured with endoscopic resection: a case report. J Med Case Report 2012; 6(1): 280.

神 経 内 科

| | |
|-----------------------|--------|
| 教授: 井口 保之 | 脳血管障害 |
| 教授: 岡 尚省 | 自律神経 |
| 准教授: 栗田 正 | 神経生理 |
| 講師: 松井 和隆 (全日空へ出向) | 末梢神経病理 |
| 講師: 鈴木 正彦 | 神経核医学 |
| 講師: 谷口 洋 | 嚥下障害 |
| 講師: 豊田千純子 | 変性疾患 |
| 講師: 河野 優 | 変性疾患 |
| 講師: 仙石 鍊平 | 神経病理 |

教育・研究概要

I. 変性疾患に関する研究

1. パーキンソン病 (PD) 患者の心血管系自律神経障害に関する研究

心臓交感神経機能を反映する ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラフィと血行力学的自律神経機能検査法である Valsalva 試験により PD の心血管系自律神経機能障害を検討した。PD 患者では起立性低血圧のない未治療の初期から ^{123}I -MIBG 心筋シンチグラフィで異常を示し, また心血管系の自律神経機能障害も認めることを明らかにした。

2. PD 患者の消化管自律神経機能障害に関する研究

PD 患者では約 90% の症例で消化管機能障害を認め, 早期から出現する自律神経機能障害の一つである。PD の消化管自律神経機能障害に対する Nizatidine の効果を Gastrointestinal Symptom Rating Scale (GSRS) を用いて評価し検討した。Nizatidine は PD の消化不良, 下痢, 便秘症状を改善し, とくに心血管系自律神経機能障害の軽度の症例で有効であった。

3. PD 患者における幻視と視覚情報処理機能の関係に関する神経生理学的検討

PD 患者ではしばしば幻視を認めるが, 幻聴は極めて少ない。認知機能障害の明らかでない PD 患者における幻視と視覚情報処理障害の関係を相貌刺激による視覚性事象関連電位と聴覚性事象関連電位を用いて検討した。この結果, 幻視を伴う PD 患者では幻視の無い患者に比べ相貌に関する視覚情報処理が聴覚情報処理に比べて選択的に障害されていることが判明した。

4. 25-hydroxyvitamin D ならびにビタミン D 受容体遺伝子多型と PD 重症度との相関解析